

## 従仏逍遥

願入

九月号の光輪の「放愁抄十四」には、次の様な原稿を書いた。

「旅」は「行」くものである。

人は皆旅行者である。とどまることを許されない。人生は旅である。旅であるから行かねばならない。

然るにこの旅路には、苦楽、悲喜、矛盾、険難、恐怖等が満ちている。それ故に、快樂には執着し、苦難をば逃避して、旅路を行き貫くことを忘れる。この旅人の歩まねばならぬ大地を現実という。人は皆この現実の中にあり、現実の大地を離れては、行歩すべき場所はない。然るに人は過去を回顧することが出来、又、未来を予想することが出来る。若し過去の回想のみに生きて、現実ととりくむことが出来ないならば、それは旅に疲れた老人であり、未来の希望のみあって、過去と現実に盲目なる者は、無智の血気である。突進、暴行、犯罪、破滅が待つ。それ故に、一歩一歩の行歩は、過去の歴史を背負うたものでなければならぬし、未来への躍進を持たなければならぬ。前者を智慧と言ひ、後者を感情という。この二者を一ならしめるものこそ「願」である。盗人、大和路を走ることが出来る。然しそこには、思想も歌も詩も何ものもない。名利の子も亦、現実の大地、歴史的現実の大地を忘れて、人生を空過しているのである。

人生空過の我をして、歴史的現実につれかへすものは真実の教であり、人生逃避の我をして現実を撰取せしめるものは、信心の智慧であり、生の老衰を活かして永遠の若人たらしむるものは、願である。しかしてこの三者は具体的には唯一である。私にとつての旅行者とは、誠に願生、願入弥陀界の旅路のことである。

病床

今日は八月二十四日、島根県連講習最後の日である。この五日間又しても念仏の心は、益田の小河さんのあの講堂に往く。今日代講の正覚寺から「唯今開講の式を終り一席お話いたした処であります。先生からの御言葉一同涙の中に有難く頂きました。島根の先生方も全部お揃いで、同朋は講堂にぎつと一ぱいであります。憶念の中に、護念の中に有難い会座を展開させて頂きます。」とある。有難いことである。御同朋の精進が思われる。感謝せずにはいられない。

病床の明暮れは静かである。ものを思うにふさわしい。凡夫には、病ほど嫌なものはない。法然上人は「浄土をねがう行人は、病患をえてひとえにこれを楽しむ」と仰せられたが、私ども凡夫には病を楽しむことはむずかしい。蓮如上人すら「然れどもあながちに病患をよろこぶ心更に以て起らず、浅ましき身なり、漸づべし悲しむべきものか」と述懐しておられる。然し病を得て病を喜ぶことは出来ないが、病によつて静かに御法を喜び御念仏を喜ばせて頂くことは出来る。花岡美津子の便の最後に

「混沌と世相の濤の渦巻くを 何しかもかくいまを病めりや」と歌一首最後につけてある。

「かく病むも宿業なれど、おほけらく飛躍せまほしこの時にして」

これが今の私の率直な返事である。何時も多忙な中に生きていて、ものを静かに考えさせて頂く暇のないものが、こうして安静を命ぜられて、考える時を持ったことは嬉しいことである。光明団の三十年の歩みを静かに回想し、現実日本の様相を想い、如何にあらわばならぬか、何を為すべきか、次から次ぎと問題が出て来る。御聖教の言葉をかみしめて、今更の如く味わせて頂く、たった一人静かな病床の明け暮れではあつても私の心は多忙である。

長い病の床にあるものは誰でもそうであるらしい。それは、夜明けのうれしさである。夜早くから眠るので朝は早くから目がさめる。東の窓に「あけの明星」が輝くのがまず見える。やがて東の空が緑色に明けはじめ。六時になると起床の鐘が鳴る。コウモリが幾十百と空一めん飛び回っている。やがて、東の空はだんだんと色うすれ、雲は紅に、橙色に、紫に、金色に輝いて来る。曇った日には、そうした美しさは見えないが、それでも窓を通して、空が見えるのは誠に嬉しいものである。

窓辺には蘭の鉢がならんでいる。どれも勢いよく育っている。外の景色を見ることが出来ないで、わずかに御便所に立った時、小さい窓から外の様子をながめるだけの自分には、窓辺の蘭の緑がこの上なく、私を慰めてくれるのである。何時もは、春咲くと思っていたのに、八月中旬頃になつて鈴虫蘭が五箇ほど白い花をつけてくれた。これは誠に嬉しい贈り物であつた。言うまでもなく蘭は四君子の一人である。誠に永遠の徳相にかおるこの君子が一つづつ咲いて、一つづつ散つてゆく、静かにこの君子と相對して念仏申すことではある。

「いささか所労のこともあらば死なんずるやらんと心細くおぼゆることも煩惱の所為なり」

歎異抄の九章が頂けることである。煩惱のありのままの相、この死にとうない心こそ、本願のたしかさを立証する心である。何がおころうと、どんな心が出て来ようと、南無阿弥陀仏がありのままをつんでいて下さる。

心臓が大変調子が悪い日などは、折角御見舞に来て下さった同胞にさえお会いが出来ないで、御念仏申して静かに寝ている。

すると、お隣の塩田の屋根に雀が来てとまつて、羽をひろげたり、丸くなつたりして遊んでいる。町の中で小鳥の声を聞く由もないが、病床では、この雀さえ、この上ない有難い友である。

会えなくなつた日、御同朋の一人一人が訪れて来て、共に語つて下さる。一人で寝ていても一人ではない。恒沙無量の仏たちにとりまかれて、その護念の中に生かされている。念仏の私は幸である。人が見て下さつても幸である。私が考えても幸である。私は幸である。病をすれば病をして、知らせて頂くみ心がある。元気な時には知ることの出来ぬ世界がある。

「静かに考えよ。静かに大悲の御意に入れ」

一年中、しゃべりつづけて走っている私に、こうして、静かに、思念の時を与えられることは有難いことである。毎日一人静かにものを思うのが私の今頃の仕事である。やがてこの思いを同朋にお伝えする時が与えられれば私は幸である。然しその

時がついに与えられなくても幸である。私は大慈悲故に、御同朋故に幸である。唯お念仏一つに生かされる幸である。

「仏に從うて逍遙シテ自然ニ歸ス 自然ハ是レ弥陀国ナリ」（法事讃）

この御文は、善導の法事讃のおことばであるが、何と美しい有難い文字であろう。日にも毎日

「仏に從うて逍遙して自然に歸す。自然は即ち是れ弥陀国なり」と口に出る。最近右田と福山で自然法爾章を語ってから、更に深くこの御文が思われる。

そこで、私の生きる日の限り、「從仏逍遙」と題して、随筆録としたい。何回続くものであろうか。